

大津直子 提出 学位申請論文（課程博士）

『源氏物語』の淵源』審査要旨

論文の内容の要旨

本申請論文は、『源氏物語』の淵源、深層について、『源氏物語』が紡ぎ出すさまざまな表現の分析をふまえて、人物造型、表現空間、享受などの視点からの論証を通して明らかにしようとしたものである。

本申請論文は、序をはじめとして、次の三編十一章及び付編からなり、第一編が『源氏物語』人物造型論、第二編が『源氏物語』表現論、第三編が『源氏物語』享受論として構成されている。

第一編 人物造型を構築する表現と深層（四章）

第二編 物語世界を構築する表現と深層（四章）

第三篇 『源氏物語』の表現世界と現代語訳の交渉（三章）

第一編「人物造型を構築する表現と深層」は、「へ帯しどけなき」光源氏―須磨における靈異譚との連関―、「へ観魚」をする冷泉帝―六条院行幸の表現構造―、「光源氏のへ愛敬」―第一部世界、第二部世界にまたがる人物批評について―、「へしるしの帯」―中の君人物造型の方法―の四本の論考を通して、登場人物に固有に用いられる表現が言語化されていない登場人物たちの心奥を暴くものであることを論じる。

第一章では、光源氏の人物造型について、須磨の地の「海見やらるる廊」で動行するへ帯しどけなき」光源氏を対象として、形容詞「しどけなし」の語感を検証した上で論じる。平安時代に海上を往来する人々が抱いた海竜王の俗信をふまえ、へ帯しどけなき」光源氏の姿が異形の物に見入られ異界へ連れ去られる危さを宿すものであるとする。また、へ帯しどけなし」という表現の源泉が、漢籍か

ら日本の上代文学へと引き継がれた「帯緩シ」という表現にあることをふまえて、『源氏物語』は、「しどけなし」という語を選び取ることによって、異形のものに見入られる美という光源氏の先天的特質と関わる表現性を獲得したとした。第二章では、冷泉帝の人物造型について、紅葉の賀に装えて六条院行幸を行った冷泉帝を対象として、〈観魚〉という儀礼を検証した上で論じる。〈観魚〉の源泉が、天皇が先帝や尊属臣下に対して自身の資質を証明するための儀礼であり、『孝子伝』において母親のために、魚を求め歩く話型、求魚譚にあるとする。また、冷泉帝の真意として、〈観魚〉を通して、苦衷を抱いた亡き母藤壺の記憶を呼び起こし、晴れの場合で孝心を表明することがあるとした。第三章では、光源氏の人物造型について、内大臣と朱雀院の光源氏批評に見える〈愛敬〉という表現の検証を通して論じる。漢語「愛敬」が和文脈に定着する変遷をたどり、〈愛敬〉が、愛欲、慈愛、儒教的美德の三つの系譜を持つことにあることを確認した上で、『源氏物語』は、各語感を重ね合わせながら〈愛敬〉ある人々を無自覚なまま他

者を魅了し執着を抱かせ、時に今ある秩序を崩壊させる可能性を宿す人物として光源氏を語っているということ、また、内大臣と朱雀院が光源氏の〈愛敬〉を語る際に、故桐壺院を想起しているという事実により、秩序を乱す光源氏の資質や桐壺院の光源氏偏愛が、政敵のまなざしを通して語られているということ、さらには、光源氏の〈愛敬〉は、他者の心を観察し乱そうとするときに現れるものであり、光源氏が自らの美を自覚し、壮年期の彼の美につながるものであるとした。第四章では、中の君の人物造型について、中の君の〈へしるしの帯〉が語られた意義、平安文学における出産儀礼の表現、平安時代の腹帯の習俗が記された有職故実書などの分析を通して論じる。〈へしるしの帯〉は、匂宮、薫の間で揺れ動く中の君の心情に働きかけ、姉大君とは異なる生き方を志向させ、薫から遠ざけ、浮舟の登場を促すモチーフであるとする。また、大君の生前、中の君が勤行する際に掛け帯をしていたことと比較して、〈へしるしの帯〉が、安易に宇治を離れ、結婚することを禁じた父八の宮の遺言に背いた証であり、中の君は、〈へしるしの

帯を締めることによって、匂宮の妻としての世俗的な幸福を希求する人物へと変貌したとした。

第二編「物語世界を構築する表現と深層」は、「紀伊守邸のへ泉」——中の品の物語始発の時空——、「須磨の地とへ黒駒」——光源氏と海人の関係性から——、「二条院へ雪まろばし」——藤壺再来の始原的論理——、「六条院へ釣殿」——光源氏による内大臣批判の基底——の四本の論考を通して、一回的に描かれる空間表現が当該場面の深層とどのように関わっているのかについて論じる。

第一章では、六条院以外では紀伊守邸にのみ描かれるへ泉の始原性の分析を通して、光源氏と中の品の女性との恋愛譚が紀伊守邸から語り起こされる意義について論じる。公卿日記には、貴族たちがへ泉の湧出を瑞兆ととらえ、自邸のへ泉を儀礼空間として珍重したことが繰り返しが記されるといふ事実を確認した上で、へ泉を神聖視する発想は、へ泉を生命力復活の霊水ととらえ、ほりにいる人間に覚醒を促す聖性を持つと考える古代の観念に基づいているとする。

また、紀伊守邸の〈泉〉が、光源氏を「別伝系」の主人公として覚醒させる空間であったとした。第二章では、古代社会における〈黒駒〉の始原性と、須磨と
いう土地の歴史的事実性に関する分析を通して、〈黒駒〉が『源氏物語』に一度
だけ語られる意義について論じる。〈黒駒〉が、歴史上、祈雨神に働きかける呪
的な性質を持つことから、『源氏物語』において光源氏の転機となる雨を降らす
役割を持っているものとした。また、〈黒駒〉が蟄居する光源氏の持ち物として
はふさわしくないこと、須磨が海人以外の人間がほとんど住まない土地として語
り起こされていること、さらには、光源氏と摂津守をはじめとした貴族社会の人
間との関係が希薄化していることになどにも着目し、摂津国は農耕の困難な土地
であり、平安初期に貧困ゆえに過疎化が進んだこと、ほぼ同時期に牧を管理する
人間が海上に進出したことを示す歴史資料をふまえて、『源氏物語』の深層には
〈黒駒〉を捧げた海人の力が語られているとした。第三章では、女帯の文芸性の
分析を通して、「朝顔」巻末に、〈帯しどけなき〉姿で〈雪まろばし〉をする女童

が語られる意義について論じる。女童の〈帯〉のあり方について実態とは異なる表現が取られているという事実をふまえて、『源氏物語』が、光源氏の行動原理を形成する物語の根源となる魂を持つ藤壺の亡霊を呼び込むために、天の石屋戸において裳の緒を押し垂らして天照大神を引き戻す天宇受売命と同様の役割を担う女童という神話的発想を援用しているとした。第四章では、〈釣殿〉という殿舎の分析を通して、他者を悪しざまにいうことを嫌う光源氏が、内大臣家の人々の前で唐突に内大臣を批判する意義について論じる。〈釣殿〉は、会談や軍事基地に用いられた古代中国の釣台を起源とし、日本古代社会においては勝機を神に問う占いのための殿舎として成立したとする。〈釣殿〉が寝殿造に組み込まれる際には、母屋から遠く、母屋の前方に造営されるようになる。また、〈釣殿〉は、閉鎖性を保つ中国の釣台とは異なり、敵ともなりうる正体不明の存在と相対する外界との連結点であり、後代は異形の者が立ち混じる芸能、能舞台へと変容してゆくともいう。さらに、『源氏物語』が、〈釣殿〉という空間の意味性を

援用しながら、他氏に対する光源氏の攻撃性と心奥に潜む血統意識を浮かび上がらせてゆくともした。

第三編「『源氏物語』の表現世界と現代語訳の交渉」は、「へ旧訳」の表現世界への階梯―「薄二藍なる帯」はなぜ削除されたか―、「組み替えられる表現世界―へ旧訳」からへ新訳へ―、「山田孝雄と『源氏物語』の交渉」の三本の論考を通して、昭和源氏と称される谷崎源氏を中心に、『源氏物語』の内なる生命であり、文化伝統を発生させる原動力でもあり、さらには、語を自らの言語生活に引き込む行為でもある、現代語訳について論じる。

第一章では、昭和十四年（一九三九）に刊行が開始したへ旧訳における訳者の創意について、「賢木」巻の、密会露見の場面において光源氏の「薄二藍なる帯」が削除された意義について論じる。へ旧訳起筆時、谷崎は、当時の社会通念に抵触する危険がある官能的な箇所を上手く臙化すること、むしろそれによって物語の「色気」を増幅させることを書簡で宣言していた。これは、長らく削除

行為の主体と考えられてきた校閲者山田孝雄不在の禁忌コードであり、谷崎文学の根幹をも貫く重要な発想であり、谷崎は、古典文学における帯の文芸性をふまえて、「薄二藍なる帯」を削除したとした。また、一つの言葉の削除の検証を通して、原文を基盤としながらも、谷崎が自らの創意をもって『源氏物語』に挑み、〈旧訳〉が谷崎独自の表現世界を形成しているともした。第二章では、〈新訳〉草稿に残る〈旧訳〉の削除箇所になされた加筆行為の検証を通して、時代性という視座でのみ捉えられてきた〈旧訳〉と〈新訳〉二つの表現世界の変容について論じる。谷崎は〈旧訳〉序文で、不敬箇所のみをわずかに削除したと謳っているものの、実際の数は約四百六十箇所にもほり、うち六割が不敬という観念には抵触していない事実がある。さらに、全削除箇所の精査によって、同居する異性に向けた性的なまなざしが伺える文脈に削除があるという新たな実態も浮かび上がり、不敬という発想の限界と、谷崎源氏には当事者の言説からは見出せない本質が内在し、訳者の感性のもと生成された〈旧訳〉が、より原文を重視し学究的

に生成された〈新訳〉へと姿を変えたとする。第三章では、山田孝雄の谷崎源氏校閲の意義について、〈新訳〉草稿への書き入れの調査分析及び自筆原稿との照応を通して論じる。草稿と自筆原稿においては、浮舟への思い入れと、浮舟の精神の葛藤に女性読者に対して生き方を指南する教導的価値があるとする考えが示されているとする。また、不敬の極点とされる光源氏と藤壺の密通を弁護し、春宮候補である匂宮に浮舟を追いつめ入水に至らしめた責任があると断罪してもいるとした。〈新訳〉校閲では、『源氏物語』の注釈書を丁寧に見込み、それらを乗り越え新しい作品論を展開されていたとする。さらに、生前山田が言及を避けた、物語の主題を宇治十帖の世界に求める作品観を確認した上で、現代に至るまで国体論者としてのイメージに呪縛されている校閲者山田孝雄像を複眼的にとらえる必要性があるともした。

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、『源氏物語』の淵源、深層について、個々の人物に関わる固有の表現、個々の空間を醸成し、構築する表現、及び享受としての現代語訳などを具体的な対象として、人物造型論、表現空間論、享受論などの視座から明らかにしようとしたものである。

第一編「人物造型を構築する表現と深層」では、光源氏、冷泉帝、中の君の三人の登場人物を対象として、それぞれの人物に固有に用いられている表現が、いかに作中人物の本性を象っているのかについて明らかにしたものである。とくに第二、四章が注目された。第二章「へ観魚」をする冷泉帝―六条院行幸の表現構築―」では、冷泉帝の人物造型について、藤裏葉巻巻末の、朱雀帝と冷泉帝との贈答歌に注目し、二代の帝が六条院に行幸した意義を問いかけ、かつての紅葉の賀に装えて、冷泉帝が六条院行幸を行うのはなぜかという問題提起のもと、冷泉

帝の真意を明らかにしようとしたものである。論は、「池の魚を、左近少将とり」が、紅葉賀卷の朱雀院行幸にはなかったという事実から、冷泉帝の真意を問い直し、そこから「観魚」という儀礼、『孝子伝』における「求魚譚」を検証した上で、冷泉帝は、苦衷を抱いた亡き母藤壺の記憶を呼び起こし、晴れの場で孝心を表明したのだと結論づける。「観魚」の淵源を確認し、冷泉帝の内面を暴いた論としては評価できるものである。ただ、問題の始発となった冷泉帝の「世のつねの紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を」の歌言葉そのものに、冷泉帝の光源氏への「孝心」は内在しているのか、直前の光源氏と太政大臣の贈答歌は第一部の主題、第二部への物語の展開とはどのように関係しているのか等の問題についての論究があると、より結論が強化されたのではないだろうか。第四章「へしるしの帯」―中の君人物造型の方法―では、まず、中の君の帯が、懐妊した身体を特徴づける「へしるしの帯」と語られた意義を問いかけ、平安文学における出産儀礼の表現、平安時代の腹帯の習俗が記された有職故実書などの検証を

通して、中の君は、へしるしの帯を締めることによって、匂宮の妻としての世俗的な幸福を希求する人物へと変貌したと結論づける。物語の淵源である、出産儀礼、腹帯の習俗を確認した上で、へしるしの帯を締めた中の君と関わる薫の行動や中の君の心情へ与えた影響を分析した研究方法は興味深い。既存の中の君の物語における位置づけを述べた点も評価できる。ただ、へしるしの帯だけでなく、多角的な視点による中の君の造型方法についての論究がほしいところである。

第二編「物語世界を構築する表現と深層」は、「紀伊守邸のへ泉」、「須磨の地とへ黒駒」、「二条院へ雪まろばし」、「六条院へ釣殿」などを対象として、一回的に語られる場所や空間表現が、それぞれの場面の深層とどのように関わっているのかについて明らかにしたものである。とくに第一、四章が注目された。第一章「紀伊守邸のへ泉」では、はじめに、光源氏が方違えに赴いた紀伊守邸での泉で酒を飲む場面に注目し、光源氏と中の品の女性との恋愛譚が紀伊守邸から

語り起こされる意義を問いかげ、へ泉への始原性、公卿日記における儀礼空間としてのへ泉への歴史性、へ泉への神聖視する発想などの分析を試み、光源氏が中の品に志向する背景として、人間に覚醒を促す聖性を持つへ泉への持つ生命力があるとした上で、紀伊守邸のへ泉へのは、光源氏が「別伝系」の主人公として覚醒させる空間であったと結論づけた。物語の淵源、源泉である、へ泉への始原性、儀礼空間としてのへ泉への歴史性、神聖性を確認した上で、光源氏の色好みとしての志向を解明しようとした研究方法は首肯されるものである。ただ、中の品の女君たちとの物語を「別伝系」と規定した論理は、帚木巻の雨夜の品定めを聞いて藤壺の中宮を思う光源氏とどのように繋がるのかという問題を孕むものと思量される。また、考古資料、絵巻などによって鬼門を確認する作業など、へ泉への歴史的事実性の再検証も必要であろう。第四章「六条院へ釣殿」では、常夏巻で、光源氏が涼をもとめて六条院のへ釣殿に夕霧をともなう場面に注目し、平安時代文学のへ釣殿、へ釣殿の始原としての中国の「釣台」、寝殿造における

〈釣殿〉の意義などの分析をした上で、〈釣殿〉は、閉鎖性を保つ中国の「釣台」とは異なり、正体不明の存在と相対する外界との連結点であり、『源氏物語』が、〈釣殿〉という空間の意味性を援用しながら、他氏に対する光源氏の攻撃性と心奥に潜む血統意識を浮かび上がらせてゆくと結論づけた。物語の淵源である、〈釣殿〉の始原を確認した上で、光源氏の内面にある王族意識を指摘したことは意義のある成果といえよう。

なお、第一、二編を通して、「始原」、「深層」、「発想」とする述語と、標題の「淵源」とはどのように弁別されているのか不明であり、それらについての言及も必要である。

第三編『源氏物語』の表現世界と現代語訳の交渉」は、「旧訳」の表現世界への階梯―「薄二藍なる帯」はなぜ削除されたか―、「組み替えられる表現世界―旧訳」から「新訳」へ―、「山田孝雄と『源氏物語』の交渉」などの論述を通して、昭和源氏と称される谷崎源氏を中心に、『源氏物語』という古典文学の

享受としての現代語訳の意義について明らかにしようとしたものである。とくに、第一章「へ旧訳」の表現世界への階梯―「薄二藍なる帯」はなぜ削除されたか―が注目された。『源氏物語』の賢木巻の本文、へ旧訳とを比較検討した上で、谷崎は、古典文学における帯の文芸性をふまえて、「薄二藍なる帯」を削除し、原文を基盤としながらも、谷崎独自の表現世界を形成していると結論づけた。『源氏物語』の享受としての現代語訳について注目した点は評価できる。しかし、本章が、第一編の第一章「へ帯しどけなき」光源氏」、第四章「へしるしの帯」中の君人物造型の方法―との関連性のもとに論じる視点があれば、本申請論文の構成としての結構がより明確になったものと思量される。

右に示したように、本申請論文の特徴、成果は、作中人物に固有の「しどけなし」、へ観魚、へ愛敬、「しるしの帯」に注目し、それぞれに内在する古代的な発想ともいうべき物語の淵源を検証し、新たな作中人物論を提起したこと、紀伊守邸のへ泉、へ六条院のへ釣殿などの空間表現を対象として、一回的に語られる

場所や空間がそれぞれの場面の淵源、深層とどのように関わっているかを指摘したこと、谷崎源氏を中心に、『源氏物語』という古典文学の享受としての現代語訳の意義を論究したこと、などにあるといえる。

以上から、本論文提出者大津直子は博士（文学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十四年二月十六日

主査	國學院大學教授	針本正行	印
副査	國學院大學教授	豊島秀範	印
副査	國學院大學教授	秋澤互	印